

2007年9月3日

淀川水系流域委員会 様

宇治・世界遺産を守る会
藪田秀雄

淀川水系流域委員会において審議・検討を要請する事項1

- 1、「宇治川の現状と課題」において天ヶ瀬ダム再開発・1500m³/秒放流計画に関連してすでに実施された宇治川整備・改修工事によって宇治川の自然環境と景観が大きく破壊されていること、その修復が宇治川河川整備において肝心要であることを問題提起しました。

審議・検討要請事項

①塔の島・橘島護岸の抜本的改善方策の検討

危険と環境と景観破壊の塔の島・橘島の護岸を、安全性の確保、環境、景観を修復する観点で抜本的に改善する方策を検討されたい。

②塔の川締切堤、天ヶ瀬吊橋から塔の川への導水管、亀石遊歩道（宇治山田護岸工事として亀石周辺埋め立てた）の撤去の検討

環境と景観破壊、流下能力の阻害をおこしているこの3つを環境と景観および流下能力の修復の観点から撤去を検討されたい。

第2次委員会は、すでに宇治川の流下能力増大に逆行するものとしてこれら3つの撤去検討の意見を出しています。

河川管理者は、導水管の撤去、遊歩道の撤去について委員会や地域の意見を無視・軽視しています。

③水生生物生息環境の修復

砂州の消滅が水生生物生息環境に大きな影響を与えていると考えられます。的確な水生生物生息環境の調査をもとに、生息環境の修復やその一環として砂州の復元の方策を検討されたい。

2、塔の島地区流下能力1200m³/秒の検討

淀川水系河川整備計画原案は、戦後最大洪水である昭和28年台風13号洪水を安全に流下させるとしている。「(3) 具体的な整備内容 3」宇治川・瀬田川①宇治川」で「山科川上流において1500m³/秒の流下能力を確保するため、以下の対策を実施する。これにより、宇治川において戦後最大の洪水に対する安全な流下が可能になるとともに、洪水後期の琵琶湖の速やかな水位低下を図る。」として「・隠元地区において、引堤及び河道掘削を実施する。・塔の島地区においては優れた景観が形成されていることから、学識経験者の助言を得て、景観、自然環境の保全、親水性に配慮した河道整備を実施する。・天ヶ瀬ダム再開発事業に基づき、天ヶ瀬ダムの放流能力を増強させる。」として、「塔の島地区の河床掘削による河積の確保」、「天ヶ瀬ダム再開発放流能力の増強はトンネル式放流設備」を示している。

宇治川塔の島地区は「宇治川の現状と課題」でも提起しているように、2つの世界遺産を一体となった宇治のシンボル景観であり、宇治市景観計画において重点地域であり、宇治川は景観重要公共施設である(2007年策定)。

河床掘削は水位低下をもたらし、名勝 亀石が陸に上ってしまうことになり、環境と景観の破壊をさらに進める危険性がある。

治水のための流下能力増大の必要性和河川整備(河床掘削)による自然環境と景観の破壊をいかに抑制し、むしろ環境と景観の保全・再生をすすめるのか、改正河川法が精神が問われている問題です。

河川管理者は、流域委員会の意見を踏まえ、 $1500\text{ m}^3/\text{秒}$ 以下の流下能力も検討すべきであるにもかかわらず検討を放置しています。

宇治川洪水時(天ヶ瀬ダム上流地域で2日間で 272 mm の降雨があった場合、大戸川ダムと天ヶ瀬ダムで流量調節)の天ヶ瀬ダムの放流量は $1200\text{ m}^3/\text{秒}$ です。宇治橋附近の計画高水流量は $1500\text{ m}^3/\text{秒}$ としている。天ヶ瀬ダム下流で $300\text{ m}^3/\text{秒}$ も増加する河川はない。

したがって塔の島地区 $1200\text{ m}^3/\text{秒}$ の検討は、宇治川洪水に対応する流下能力の増大と環境と景観への影響を最小限に抑えるために河床掘削量をできる限り少なくする観点からすれば検討に値すると考えます。

また琵琶湖後期放流の放流量は宇治川の流下能力に合わせるべきものと考えます

①現在の宇治川塔の島地区の本当の流下能力を精査すること。

平成16年7月18日の琵琶湖河川事務所の天ヶ瀬ダム再開発に関する調査検討(中間報告)では現状で約 $1100\text{ m}^3/\text{秒}$ を流すことができるとしている。

現状の流下能力を精査する場合、塔の島締切堤、天ヶ瀬吊橋から塔の川への導水管および亀石遊歩道、これら3つの流下能力障害工作物の撤去を加味すること。

② $1200\text{ m}^3/\text{秒}$ の流下能力に必要な河床掘削量および水位低下の程度を検討すること。

3、宇治川堤防の安全性について検討すること。

以上